友の身をもっての教えに、感謝

友人の逝去に接した。友人は、家内の学生時代からの友であり、同じ団地内に住む方だけに家族ぐるみのお付き合いをさせていただき、家内は弔辞を読ませていただいた程の長年の親友であった。しかも、私と長年同じ夢を追い続けた同僚でもあり、友人でもあった。

定年退職してまだ２年、がんを宣告されて僅か６ケ月。第２の人生を十分に楽しむには、あまりにも短い時間であった。

ご家族から友人が、がんの重い症状であることを知り、在宅緩和ケア支援センター“虹”を手伝っているとはいえ、実際にどう友人に接すればいいかが解らず、ポスピス医の著書等をあさった。

一時退院した折りは、家内共々一緒に出かけたり、我が家に犬の散歩の途中で寄った時に、それとなく語り合いもした。再入院してからは、家内は頻回に見舞い、私も時々見舞った。最後の頃は、我々よりご家族が共に過ごす時間の方が大切と思い、母娘でゆっくり過ごせるようにと、幼少のお孫さんを時々お預かりもした。ご家族や見舞いに訪れる友人等に、意識定かでない中でも、「夫妻に、すっかりお世話になって……」と呟いていたという。友人が、我々の想いを感じてくださっていたことは、嬉しくもあるが、更に哀しさが増す……。

一時退院した折り、友人は所属するサークルで自らのがんの体験を話題提供し、その中で、人と人の「支え合いの輪」が何よりも大切と話した。この「支え合いの輪」の言葉を借用し、“虹”のパンフ、表札等にも「かんごと支え合いのわ“虹”」を使わせていただいた。この話を友人にすると大変喜んでくだり、「もし奇跡が起こり退院ができたら、“虹”のデイケアの最初の利用者は、私だからね」と云っていたが……。

友人の願いはこれからも“虹”の中で受け継がれて行くだろう。また、この私に、がんの方々にはどう接し、どう係わり合うかという貴重な体験を、友人は身をもって色々教えてもくださった。

私は、友のように周りの方々に引受け継いていただけるような、想い、言葉を残せるかどうか……。

その内、また一緒に夢を追いましょう、その時まで、友よ、安らかに……。

（2004 年 06 月 02 日　記）